



〈雑録〉英國經濟學界ノ近状([2])

原島，茂(譯)

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 4(5):637-647

(Issue Date)

1908-05

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051261>



英國經濟學界ノ近狀（其二）

高商專攻部

原島 茂譯

（七）經濟史研究ノ勃興

理論ノ方面ニ於テ此ノ如キ活動アリシ間ニ他方ニ於テ經濟史ニ對スル趣味ノ勃興シタルハ實ニ著シキ現象ナリ、尤モ既ニ述べタルガ如ク歷史派ノ學者ハ從來ノ經濟學ニ對シテ多クノ批評ヲ下シタリト雖モ未ダ歷史ヲ基礎トスル新經濟學ヲ興スニ至ラザリシハ頗ル遺憾ナリト雖モ獨逸ニ於テスラしゆもらーノ大著ヲ得テ新經濟學ノ勃興スルニ至リシハ全ク最近ノ事柄ニ過ギザルヲ以テ見レハ是レ必シモ怪ムニ足ラズ、英國ノ過去ノ經濟事情ニ關スル智識ハ近時著シク増

進シ之ヲ廿五年前ニ比スレバ殆ド霄壤ノ差アリ尤モ數十年前ニ在テモ此類ノ研究ヲナシタル者必シモ稀ナラズシテ、タトヘバ十八世紀ニ於テ既ニAnderson 及ビEden ハ豊富ナル資料ヲ蒐集シ十九世紀ノ三四十年代ニハ當時貨幣問題ノ沸騰シタル結果トシテTookeノ著アリ、又當時新事業旺ニ勃興シタルガ故ニ個々ノ事業ニ關スル歴史ノ世ニ出デタルモノ少カラズ、又同世紀ノ後半ニ於ケル代表的ノ著述トシテハBoard of Tradeノ最初ノ統計課長ニシテ又リカーンノ義弟ナルTornerノ「Progress of the Nation」アリ、此書ハ當時ニ於ケル英國ノ發達ガ如何ニ驚クベキモノナリシカヲ論ジタルモノナリシガ、當時ノ英國ハ實ニ旭日昇天ノ勢アリテ、過去ノ事實ヲ詮索スルコトハ最早全ク無用ノ業ナルガ如ク思惟スル者多キニ至リタレバ一八八〇年頃ニ於ケル英國經濟史上ノ最良ノ著述ハト云ハハLeon Levyノ「History of British Commerce」及ビThor-

old Rogersノ「History of Agriculture and Prices」ノ二書ヲ推獎スルノ外ナカルベシ、然レドモ前者ハ通俗的ノ書トシテハ好著ナルモ學術的ノ書トシテハ遺憾ナキヲ得ズ又後者ハ非常ナル苦心ノ結果ニ成リシ著述ナルモ其蒐集シタル材料ハ未ダ十分根本的ニ中世ノ制度ヲ明瞭ナラシムルニ足ラズシテ、一層深遠ナル研究ニ從ハントスル者ハ勢ヒ援ヲ海外ノ著述ニ求メザルヲ得ズ、去レバ當時ノ研究者ハBrentano, Odenkowski, Schanz, Nasse. 及ビHeldノ著書ニ於テ未ダ内國ニ見ザル科學的研究法ノ適用セラレタルヲ見テ多大ノ刺激ヲ受ケタル結果獨人ノ著述ニ對シ實價以上ノ尊敬ヲ拂フ者アリシハ毫モ怪シムニ足ラザルナリ、尋デ此ノ方面ノ研究ニ新紀元ヲ劃シタルハ實ニ一八八二年ヨリ同八四年ニ至ルノ間ニシテ吾人ハ三大著述ヲ得タリ、即チToynbeeノ「Industrial Revolution」ハ其一ニシテ本書ノ主要ナル價值ハ過去ニ關スル公平ノ研究ガ熱心ナ

ル社會改良論者ノ爲ニ有要ナルコトヲ解明セル

ナリ。

ノ點ニ存ス、次ニ Cunningham ノ「Growth of English History and Commerce」ハ其ニニシテ本書ハ實ニ凡テノ方面ニ亘リテ史の攷究ヲ試ミタル一大著述ナリト云フベク加之モ英國ニ於テハ其最初ノモノナク、予ハ今之ニ就テ詳述スルノ違ヲ有セズト雖モ、要スルニ本書ハ巧妙ニ且ツ百科字書のニ著述セラレ英國ノ國家的發展ガ秩序的ニ進行シタルモノナルコトヲ根本的ニ説明シタルモノナリ、而シテ Seeböhm ノ「The English Village Community」ハ實ニ其ニニシテ彼ハ中世ノ農業史ノ研究上始メテ吾人ニ正當ナル針路ヲ示シタル者ト云フベク、縱令莊園經濟ハ恐クハ著者ノ云フ程ニ完備セル制度ニハアラザリシトスルモ、其大體ノ様子ヲ知ルニアラザレバ到底中世ニ於ケル農業狀態ヲ解スルニ由ナシ、又往昔ノ村落ノ農業組織ノ輻軸タル Yardland ニ關スル明瞭ナル説明モ亦始メテ此著者ノ與ヘタル所

ナル。爾後英國經濟史ノ研究ハ益々旺ニシテ此ニ關

スル著書ノ世ニ出デタルモノ甚ダ多シ、今ハ唯簡單ニ之ヲ列舉センニ、Maitland 教授ハ中世ノ法律ノ真正ナル意義ヲ闡明シ教會法ガ英國ニ於テモ承認セラレシコトヲ證左トシテ當時西歐全部ノ事情ハ其基礎ニ於テハ同様ナリシコトヲ明カニセシヲ以テ爾來之ニ倣フテ莊園及ビ市ノ歷史ニ關スル資料ヲ公ニスル者多キニ至レリ、次ニ Powell ハ農民ノ地位ノ上進シタル有様ヲ明カニシ、Leodam ハ十六世紀ノ貴族專有牧場(Enclosures)ニ關スル官府ノ記錄ヲ上梓シ、Stevens, Sir, George Birdwood 等ハ東印度貿易ノ起源ニ關シテ等シク有力ナル資料ヲ供シ、Leonard 嬢ハすちゆあーど王朝ノ初期ニ當リ救命法ノ制定セラレタル事情ヲ説明シ、Galon 及ビ Unwin ハ中世ノ同業組合ト近世ノ職工組合トノ關係ヲ説キ Webb 夫妻ハ十七八世紀ノ地方自治制ヲ説ヒテ

遺憾ナク、Grayハ博愛事業ニ關スル編年史ヲ著
 ハシ、Slaterハ後世ノ貴族專有牧場ノ歴史ヲ明カ
 ニシ又蘇國ニ於ケル製造工業ガ如何ニシテ發生
 シタルカハScottニ依テ研究セラレ、愛蘭土ノ
 産業ト英國ノ政策トノ關係如何テフ問題ハMur-
 ray嬢ノ初メテ明カニセシ所ニシテ、十九世紀ニ
 於ケル工場法ノ歴史ハHutchins及ビHarrison兩
 嬢ノ共同事業トシテ起草セラレ、當時ノ賃銀ノ
 高低ノ有様ハBowleyニ依テ調査セラレタリ而シ
 テ近世ノ勞働者團體ニ關スル事項ハWebb夫妻
 ニ依テ研究セラル、ト同時ニ資本家團體成立ノ
 傾向ハMacrostyニヨリテ遺憾ナク描寫セラレタ
 リ、若シ夫レ特殊事項ノ研究ニ至リテハEllison
 及Chapmanノ棉花貿易ニ關スル研究アリ製鐵業
 ニ關シテJeanノ報告アリ又Creightonノ傳染病
 歴史モ經濟學上頗ル有益ナル問題ヲ論ゼリ、吾
 人ハ此クノ如キ多數ノ有益ナル著書ガ英人ノ手
 ニ成リタルヲ光榮トシテ之ヲ誇ル者ナリ。

上述ノ外吾人ハ異國ノ學者ニ依リテ均シク價
 値アル助力ヲ得タルヲ看過スルコト能ハズ、即
 チPage及ビGayナル二人ノ米國學者ハ十四世
 紀ニ於テ英國ノ賦役ガ金納ニ變換セラレシコト
 及ビ十六七世紀ニ於ケル貴族專有牧場ノ歴史ニ
 關シテ貢獻スル所甚ダ多ク、Ehrenberg及Al-
 lmanナル二人ノ獨逸學者ハ英國ノ歷史上ニ於
 ケル獸毛業ノ地位ヲ一層明瞭ナラシメ殊ニ前者
 ハ英吉利製織物ノ大陸輸入ニ關シ、後者ハ英國
 政府ノ獸毛業ニ對スル施設及ビ處置ニ就テ詳細
 ナル研究ヲ遂ゲタリ、其他HasbachトLevyトハ
 共ニ英國農業ノ發展ニ留意シ前者ハ農業勞働者
 ノ成行ヲ研究シ、後者ハ資本家ノ行ヘル穀物耕
 作ノ消長ニ關シテ歷史的ノ説明ヲナセリ、又十
 八世紀ノ産業革命ニ關スルMantouxノ著書ハ佛
 國ニ於テモ亦タ科學的研究ガ復興シタルノ標徵
 トシテ見ルヲ得ベキモノナリ、吾人ハ是等ノ有
 力ナル著書ガ英人ノ手ニ成ラザリシヲ恨ムト雖

モ、學問上開拓スベキ郊野ハ尙多ク殘存スルヲ以テ今後英人ガ其手腕ヲ振フベキ餘地ノ狹キヲ嘆ズルヲ要セザルナリ。

獨創の研究ノ新傾向ガ此クノ如ク遽然トシテ英國ニ勃興スルヤ、經濟史ノ研究ハ大學ニ於ケル必須科目トシテ益々重ゼラル、ノ機運ニ向ヘリ、而シテ此種ノ研究ノ大部分ガ主トシテ劔橋大學又ハ London School of Economics ニ關係アル人々ノ爲セル所ナルコトハ吾人ガ上來ノ敘述ニヨリテ明カナルベシ、換言スレバ其茲ニ至リシハ之ヲ一方ニ於テ Cunningham ニ他方ニ於テ Hewins 及 Webb ノ功勞ニ歸セザルヲ得ズ、隨テ經濟史ガ Cambridge History Tripos 及 London 大學ニ於ケル學位試験ニ重大視セラル、ニ至リタルハ當然ノ事理ニ屬ス、而カモ之ヨリモ一層重要ナル事項ハ高等文官試験ニ於ケル經濟學論文ニ新タニ經濟史ヲ課セルコトニ在リ、而シテ其結果トシテ大學生ハ毎年經濟史ニ關シ少クモ五

六ノ論文ヲ起草セザルヲ得ザルヲ以テ彼等モ亦多少之ニ注意ヲ拂フニ至リ初學者用ノ參考書モ既ニ三四種ハ存スルニ至レリ、念フニ試験ニ汲々タル者ノ多キ邦國ニ於テハ此ノ如キ方法ニ依ラザレバ公衆ヲシテ經濟史ニ注意セシムルコト能ハザルベク經濟學ノ外ニ經濟史ノ科目ヲ設ケシハ必シモ不可ナリトハ云フベカラザルモ、之ガ爲メ却テ餘弊ヲ生ジ人ヲシテ經濟ノ理論ト經濟史トハ全ク無關係ナル專問學ナルガ如クニ思惟セシメ、事實ノ記述ト因果關係ノ研究トヲ分離シ、又ハ史的發展ニ關スル觀念ト純正學理トヲ分離セントスルノ傾向アルハ望マシカラザルコト、云フベシ。

(八) 大學ノ教課トシテノ經濟學ノ變遷

顧レバ最近ノ二十五年間ニ於ケル英國學者ノ努力ハ吾人ガ期待セシ程ノ效果ヲ結バザリシト雖モ前途ハ甚ダ多望ナルモノアリ、即チ今ヤ經

濟學ヲ教授スルノ必要ハ一般ニ認メラレ大學ノ課程トシテモ大ニ整備スルニ至リ又有爲ノ青年ハ經濟學ニヨリテ職業ヲ求ムルコト甚ダ容易ナルニ至レリ。

りか—ど派ノ經濟學ガ嘗テ天下ノ耳目ヲ聳動スルヤ其影響トノ一八二五年牛津大學ニ、一八二八年劍橋大學ニ、又一八三二年ニハだぶりん大學ニ新タニ經濟學ノ講座開設セラレ、其後久シカラズシテ倫敦ノ二大學竝ニ愛蘭土ノ Queen's College モ亦此例ニ倣ヒシモ其所謂講座タルヤ到底之ヲ獨逸ノ講座ト比スベクモアラズ、蓋シ近時ニ至ルマデ其俸給ノ多寡ニ於テモ將タ又責任ノ輕重ニ於テモ二者ノ間ニ非常ノ徑庭アリ、即チ其報酬ハ多クノ場合ニ於テ甚ダ不十分ニシテ又其任命ハ劍橋及牛津ノ兩大學ニテハ何レモ選舉ニ依リテ行ハレ、殊ニ最初ハ年限契約ヲ以テセラレタレバ其地位ハ唯官海ニ乘リ出スノ階段トシテ若クハ政治運動ヲ爲ス者ノ副業ノ如ク

ニ見倣サレタリ、而シテ斯カル事態ノ存セシ原因ハ念フニ次ノ如クナルベシ、即チ第一ニ當時ノ大學制度ニ於テハ教授ノ講議ヲ以テ一ノ裝飾トシ教育制度ノ一部トシテ見ザリシコト是ナリ又第二ニ當時ノ經濟學ハ現今ノ經濟學ト大ニ其趣ヲ異ニシタルコト是ナリ、Sir Leslie Stephenハ其言行錄ニ於テ婉曲ナル文字ヲ弄シテ曰ク、若シ夫レ Hawcutt ノ言フ所ニ據ランカ、經濟學上ノ主要ナル原則ハ甚ダ尠ナク且ツ平易ナルガ故ニ普通能力ヲ具有スル者ハ何人モ之ヲ解明スルコトヲ得ベシト、此類ノ見解ハ嘗ニ英國ノミナラズ米國ニ於テモ嘗テ多數ノ學者ガ抱持セシ所ニシテ有名ナル某經濟學者スラ其著書ニ於テ自己ノ科學的素養ニ關シテ公言シテ曰ク、予ハ唯 Bastiat ノ經濟學ノ數頁ヲ披見シタルノミ而カモ卷ヲ閉ヂテ冥想スルコト時餘ニシテ經濟學ノ網要ハ既ニ彷彿トシテ吾眼中ニ映ジタリト、又嘗テ米國ノ或大學ニ於テ總長ノ椅子ハ常ニ故

參ノ僧侶ニ許與セラレシガ總長ノ自己ノ教授科目ヲ選定スルヤ常ニ經濟學ヲ採リシト云フ、而シテ是レ全ク其入り易キガ爲メナリシト云フニ至テハ現今ノ經濟學者タル者豈ニ啞然タラザルヲ得ンヤ。

翻テ之ヲ英國ニ見ルニ、まゝしやる教授ガ今ヨリ二十二年前初メテ職ヲ劍橋大學ニ奉ゼシマデハ、劍橋牛津ノ兩大學ハ當時未ダ其經濟學講座ニ有力ナル學者ヲ得ザリキ、爾來事物漸ク改良ノ緒ニ着クニ及ビOwen大學モ亦新タニ講座ヲ設ケじゑばんすヲシテ目ザマシキ活動ヲ遂ゲシメタリ、一八七一年ニハEdinburgh大學ニ新講座ノ開始アリ而シテ其以後ハ暫時此事ナカリシガ一八八〇年代ニ至リ又形勢ノ改善アリテ先ヅ講師ヲ置キ次第漸次ニ正教授ヲ任ジタル者少カラズ、就中一八八八年第一着ニ之ヲ實行シタルハToronto大學ナリトス、Liverpool及ビGlasgowノ兩大學ハ各一八九一年及ビ同九六年ニ講

座ヲ開キ爾來Birmingham, Manchester, Leeds及ビBristolノ各大學竝ニ更ニ海ヲ踰ヘテMontreal大學モ亦漸次此制ニ倣ヒ其他ノ大學モ今ヤ既ニ講師ヲ置キタレバ其正教授ヲ置クノ日モ遠キニアラザルベシ、而シテ正教授ノ存スル所常ニ必ズ其助手トシテ講師アリ又經濟學者養成ノ爲メニハ給費生ノ制アルニ至リシノミナラズ、高尚深遠ナル學說ヲ發表スルノ機關トシテハ一八九一年以降Edgeworth教授ノ編輯スルEconomic Journal 竝ニEconomic Reviewノ兩雜誌アリ、要之經濟學ノ習得ハ今ヤ専門家トシテ立身スルノ一途タルニ至リシナリ。

上述ノ如ク學制ノ改良ハ着々改マレ、意見發表ノ機關又備ハル、仰モ此ノ如キハ經濟學ノ研究上洵ニ有益ナル事項ト謂ハザルベカラズト雖モ、一利ノ存スル所一害ノ必ズ之ニ伴フハ蓋シ數ノ免レザル所ニシテ、予ハ學者ノ教師生活ヲ爲スヲ以テ甚ダ危險ナリトシ之ヲ憂フル者ナリ

故ニSeebolin, Booth, Rowntree, Palgrave, Webb, Hobson, Money, Welsford 等ノ如ク敎職ニ就カズシテ椽大ノ筆ヲ振ヒシ學者ニ對シ殊ニ尊敬ト感謝ノ念ヲ禁ズルコト能ハズ、今後モ尙益々此種ノ學者ノ輩出センコトヲ切望スル者ナリ、然レドモ此類ノ民間學者タランニハ必ず自ラ多クノ財産ヲ有スルカ、若クハ別ニ新聞記者ノ如キ營利的ノ職業ヲ有セザルベカラズ、而カモ資産家ニシテ學問ニ興味ヲ感ズル者ハ左マデ多カラズ又新聞記者ハ往々ニシテ黨派的偏見ヲ懷クヲ免レザルガ故ニ大學ニ於テモ亦相當ニ多數ノ經濟學專門家ヲ扶持スルノ必要アリト云ハザルベカラズ。

(九) 近時經濟學ガ復興シタル

實際上ノ理由

輓近英國ニ經濟學ガ復興シタルニ就テハ尙實際上ノ原因ノ甚有力ナルモノアリト云フベシ、即一方ニ於テハ社會問題ニ對スル趣味ノ勃興シ

タルコト竝ニ之ト關聯シテ中央政府ノ官吏及ビ地方自治體ノ吏員ニ從來ヨリモ一層系統的ナル訓練ヲ施スノ必要アルニ至リタルコト是レナリ殊ニ London School of Economics ノ設立ハ實ニ其動機ヲ是ニ發セルモノニシテ其關係者ガ初ヨリ公平無私ノ精神ヲ以テ相協力シテ之ヲ設立シタル政治家の勇氣ト又創業ノ困難ヲ冒シテ之ヲ統轄シタル Hewins 氏ノ功勞トニ對シテハ吾人ハ充分ニ尊敬ノ意ヲ表スルノ辭ナキニ苦シム、而シテ又他方ニ於テ商業家タルベキ者ニモ組織的訓練ヲ與フルノ必要認メラル、ニ至リシコトハ是レ亦經濟學復興ノ一原因ニシテ Birmingham 竝ニ Manchester ノ商科大學及ビ劍橋ノ Economics Tripos ノ發生シタルガ如キ皆之ニ因ル、念フニ商業ノ組織、方法及ビ條件ヲ實際的ニ研究スルコトガ後日英國ノ商工業ヲ統率スル者ノ準備トシテ緊要不可缺ナルハ疑ヲ容ル、ノ餘地ナキノミナラズ經濟學者タラントスル者ノ爲ニモ亦

タ極メテ必要ナリ、例ヘバ Booth, Rowntree 及
Bea 夫人ノ爲シタル勞働者ノ生活ニ關スル精
緻ノ研究モ、之ヲ他ノ方面ヨリノ研究即チ企業
者ノ地位ヨリノ研究ト連結シテ企業者ノ政策ガ
如何ニシテ決定セラレ又如何ナル影響ヲ勞働者
ニ與フルカヲ明カニスルニアラズンハ到底其價
値ヲ發揮スルコト能ハザルベキナリ。

(十) 經濟學者ニ對スル屬望

予ハ最後ニ尙一言ヲ加エント欲ス、而カモ之
ヲ以テ好爭的精神ニ出デタルモノト爲サバラン
コトヲ望ム、過去一世紀間ノ經濟學上ノ言議ヲ
顧ミル時ハ學者ノ常ニ服膺スベキハ實ニ注意ノ
周到ナルコト、極端ニ走ラザルコト、ニ存スト
云ハザルベカラズ、而シテ今日ニ於テ殊ニ一層
此感ヲ深クセザルヲ得ズ、吾人經濟學者ハ半世
紀ノ長キニ亘リテ下級人民ニ對スル觀察ヲ誤リ
又之ニ對スル同情ヲ缺キシガ故ニ現今ニ於テモ
勞働者ニ對シテ演說スル場合ニハ辯士自ラ己レ

ノ經濟學者ナルコトヲ告白スルヲ恥ルホドノ有
様ナリ、又貿易問題ニ就テ見ルモ吾人ノ先輩ガ
確實ナリトシテ發表シタル言議ガ今ニシテ之ヲ
見レバ如何ニモ躁急ニ且ツ皮想ノ觀察ナルヲ以
テ見レバ一定ノ教條ニ執着ナルコトハ最モ之ヲ
避ケザルベカラザル所以ノ理益々明カナリト云
フベシ、尤モ經濟學ニハ最早爭論ノ餘地ナキ命
題モ全ク存セザルニアラズ又今日ニテハ英國ノ
產業史ノ大綱モ漸ク明カナラントスルニ至レリ
ト雖モ、未ダ實際問題ノ解決ニ有力ナル援助ヲ
與フルホドノ理論アルコトナシ、實ニヤ經濟學
ハ今尙幼稚ナリト謂ヒシまゝじやる教授ノ言ハ
能ク其真相ヲ穿テルモノナリ、吾人ガ從來學ビ
得タル所ハ唯經濟學上ニ於テハ所謂十把一束ノ
概括論ヲナスコト能ハザルヲ悟リシ一事ノミ、
氏ハ亦タ價值ノ根本の問題ニ關シテ論ズラク、
吾人ノ棲息スル此世界ニ於テ單純平易ノ學說ハ
常ニ必ズ眞理ナラズ、之ヲ說クコト愈簡潔明晰

ニシテ益々誤謬多シト、根本的問題ニ付テ既ニ然リトセバ其以外ノ問題ニ付テモ亦然リト云ハザルベカラズ、例ヘバ自由貿易ノ利益ナリヤ否ヤヲ凡テノ場合ニ通ジテ解決スルニ足ルベキ學說ノ如キハ到底アリ得ベカラズ、單ニ理論上ヨリ云ハバ自由貿易ヲ利益ナリト論ズルコトモ得ベク又之ヲ不利益ナリト說クコトヲモ得ベク、正當ナル解決ハ抽象的理論ノ敢テ能クスル所ニアラズシテ實際ノ事實及ビ將來ノ見込ヲ考量スルコトニ依リテノミ始メテ議論ノ優劣ヲ判定シ問題ヲ解決スルコトヲ得ベキナリ、嘗テまゝしやるハ經濟學全體ニ關シテ次ノ如ク痛論セシコトアリ、此言ハ亦タ移シテ以テ自由貿易論ノ批評ニ充ツルコトヲ得ベシ、其言ニ曰ク、經濟上ノ諸勢力ニ因リテ惹起セラル、種々ノ變化ノ性質及ビ方向ニ關シテ學者間ニ多クノ異論ナキモ是等諸勢力ノ關係の強度ヲ數量的ニ判定スルコトニ就テハ未ダ殆ド進歩ノ見ルベキモノナシ、

而シテ眞ニ高尚ニシテ又同時ニ困難ナル問題ハ實ニ茲ニ存スト、果シテ然リトセバ吾人ガ各眞理ナリト信ズル事項ニテモ固ヨリ多少ノ偏見ヲ含ムヲ免レザルベク到底何人ト雖モ眞理ノ代表者ヲ以テ任ズベカラザルガ故ニ固執ト偏僻トハ極力之ヲ排セザルベカラズ。

予ハ特ニ此點ニ重キヲ置カント欲ス、蓋シ經濟學者ガ經濟政策ニ容喙スルハ決シテ學理ノ說明者トシテニアラズシテ、平生産業上ノ事項ヲ研究スル一個人トシテナラザルベカラズ、然ルニ一八四〇年すちゆあーど、みるハ英國ノ哲學思想ハ黨派のナリト云ヒ而カモ彼ハ經濟學ヲ以テ哲學ノ一部トナシタルヲ以テ見レバみるハ英國ノ經濟學ヲ以テ黨派のナリト思惟シタルナルベシ、實ニヤリかゝる派ノ主張ガ當時自由黨ノ一附屬物タルノ觀アリシコトヲ思ヘバ此說亦タ一理ナキニアラズ、然レドモ若シ治チク人類ノ幸福増進ヲ圖ルベキ經濟學ヲ以テ彼ノ一黨一派

ノ小利害ノ爲メニ左右セラル、ニ任シテ怪マザルノ思想ガ今尙學者ノ胸裡ニ潜在ストセバ、之レ實ニ一大恨事ナリ、勿論予ハ敢テ學者ノ態度ガ將來ニ對スル各自ノ豫想ニ依リテ異ナルベキコトヲ否定セズ、隨テ自ラ其間ニ派ヲ生ジ對立スル者アルニ至ルハ免レガタキコトナルヲ否定セントスルモノニアラズ、即チ現今ノ英國ノ商業政策ヲ以テ永久ニ繼續シ得ルモノト思爲スル者ニ取リテハ將來如何ナル變動ヲ生ズベキカラ研究スルハ固ヨリ無用ノ論ナランモ、苟モ輿論ノ向フ所ハ早晚行ハル、ノ實例多キヲ以テ見レハ英國商業政策ノ變化ハ其事ノ可否ハ別問題トスルモ殆ンド必至ノ大勢ナルヲ看取スルニ難カラザルヲ以テ、將來ノ政策ニ對シテ、此際ナルベク有力ナル批評ヲ與ヘラレンコトヲ希望セザルベカラズ、念フニ吾人ノ主張スル選擇關稅政策(Policy of Preference)ニ反對スル論議ノ最モ有力ナルモノハ、此政策ガ結局一變シテ不必要且ツ

好マシカラザル保護政策ニ變ズベキガ故ニ不可ナリト云フニアリ、然レドモ英國國民及ビ英帝國ノ發展ヲ企圖スル以上ハ多少ノ危險ハ之ヲ冒サザルベカラズ、而シテ其危險ハ今後各種ノ手段ガ實行セラル、ニ當リ有力適切ナル批評ヲ加フルコトニ依リテ之ヲ最少ナラシメ得ベク又然カセザルベカラズ、現時北米合衆國及ビ佛國ニ於テ極端ナル保護主義ノ行ハル、ハ之ヲ學者ノ態度ガ餘リニ學者的ニシテ實際ニ通ゼザルノ弊ニ歸セザルヲ得ズ、故ニ英國ノ經濟學者タル者ハ宜シク之ニ鑑ミ無用ナル偏見ヲ固執シテ國家ノ重大事件ヲ決スル場合ニ無關係ノ地位ニ立タシメラル、ガ如キコトナキヲ期セザルベカラザルナリ。(完結)